

京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修のための教材開発

- 中級会話教材制作 -

高橋 純子 小池 康

要 旨

韓国人日本語教師を対象にした日本語研修プログラムでの使用目的で中級会話教材を制作した。本稿では中級会話教材の学習目標、教材の構成、想定している授業の進め方、指導上の留意点など制作者の意図を示す。そして2006年度9月に行われた京畿道外国語教育研修院における本会話教材を使った実際の授業成果を報告し、問題点を整理し、将来に向けた改善策を示す。

【キーワード】中級会話教材 韓国人日本語教師 学習者の特徴 学習目標

Production of a Teaching Material for Developing Oral Expression Skills for Korean Teachers of Japanese

TAKAHASHI Junko, KOIKE Yasushi

【Abstract】 This is a report on producing a teaching material for developing oral expression skills for a group of Korean teachers of Japanese and the results of using the textbook in the teachers retraining course. The intention of the authors of the textbook, such as learning objectives of the textbook and classroom procedures, are presented. Moreover, some suggestions are made for the effective future use of the textbook and the course design of the Japanese retraining course.

【Keywords】 teaching materials of oral expression development for intermediate learners, Korean teachers of Japanese language, characteristics of the learners, learning objectives

1. はじめに

本教材は、韓国京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修プログラムにおいて口頭表現能力養成を目的とする会話教材として開発したものである。口頭表現能力の養成と一口に言ってもその間口は広い。文法知識、語彙力など日本語に関する知識を始め、発音、アクセント、イントネーションなど音声に関わるもの、さらに外国語としての日本語能力とは別に話す内容の充実度、聞き手の注意を引き、共感を促すコミュニケーション能力など多岐に渡る。今回、韓国京畿道外国語教育研修院からの要望は、発話の機会をできるだけ多く用意し、自発的な発話体験を通して「話す」ことに自信を持ち、その能力を発展していけるような教材の開発であった。

話したくなるような話題、学習者が共通に興味を示すと思われる話題の選択から始まった。さらに「話す」と言っても大勢を前にして話す、いわゆるスピーチ形式の発話なのか、あるいは友人、同僚などと話す「対話」なのか、どちらの能力を開発するのか、という選択肢もある。筆者らはその両方を盛り込んだ教材を開発することにした。

この現職教師研修プログラム全般において能力別クラス編成を行わないことになっていたが、本年度より会話授業においてのみ能力別クラス編成を実施することになった。上級と中級の2つのレベルの教材を開発し授業を行うことになった。中級の学習者には上記のスピーチ形式のある程度まとまった意見、考えを述べたり、説明、紹介をする能力の養成と共に、日常会話を切り取った場面会話の練習の双方が必要であろうと考えた結果でもある。

また現職日本語教師集団という特定の学習対象者の実際の日本語運用場面を推察してみると自分から様々な情報を発信することも大切ではあるが、それ以上に日本人や日本人日本語教師と交流し情報を交換しあったりする際に、相手の話を促したり、あいづちをうって話し手に「興味を持って聞いています」というサインを送ったりする「上手な聞き手」を養成することも必要であろうと考えた。

研修生総勢48名が4つの組に分けられ、1組12名の編成で授業をすることを想定して教材を制作した。

本稿は、2章で今年度の研修生の特徴、3章、4章、5章で、教材の構成及び制作意図、6章で本教材を使用した授業報告、7章で問題点と今後の課題という構成になっている。執筆にあたっては、5章を小池が、その他の章を高橋が担当した。

2. 研修生について

2006年度の研修生の年齢は、20代後半から50代後半までと幅広い。研修時に、研修生に尋ねたところでは日頃の日本語の接触はあまり多くないとのことであった。日本人日本語教師が同僚にいて日本語を直してもらえ環境にいるという教師が1名いたが、それは例外的に恵まれた環境であり、現実には、日常生活では日本人との日本語での接触はほとんどない様子であ

った。若い年齢層の研修生の中には、ユースホステルを使って日本を訪れていたり、年配の研修生では、学生を引率して修学旅行や学校の旅行で日本をかなり頻繁に訪れている人もいた。しかし、韓国での日常生活で日本人と会話をする機会はほとんどないというのが大半のようであった。

意識的にテレビや映画を通しての日本語接触の機会を得ようとしている教師の姿も見られたがそれは少数で、実際には日々の仕事に追われ、意欲はあっても時間的余裕がないという研修生が多いようである。

3. 構成

本教材は1コマ90分の授業9回で使用するという条件の下に作成した。そして、

- (1) 紹介、説明、意見表明など複数の聴衆に向かって話す口頭表現能力の養成
- (2) 友人や同僚などとの自然な対話を目指す口頭表現能力の養成

という2本立ての目標をかかげた。

本教材は、9コマの授業で使用するという条件下、最大限に話す力を育てるという目的で作成されたものである。教科書だけが一人歩きするのではなく、授業でどのように使うかという授業設計も考慮して各トピックを配置した。

教材第1課、つまり1回目の授業はウォーミングアップであり、話し手と聞き手が協力しあって会話を続けて行くことを学習目標としている。話すだけでなく、よい聞き手を育てることを目指している。この協力して会話を続けて行く技術はこの回で終わるのではなく、その後に続く授業でも実践するよう指導する。

第2課以降、つまり2回目以降の授業は、共通のトピックで複数の聞き手を相手に一人で比較的長いまとまった話をする練習、すなわち上記(1)の目標を実現するものと、2人1組、あるいは3人1組の少人数での対話、すなわち上記(2)の目標を実現するものと交互に組まれている。目標(1)にのっとった課が、下記の表1テキストの構成に示される2-1、3-1、4-1であり、目標(2)にのっとった課が、2-2、3-2、4-2である。それぞれの最後の課5-1、5-2、つまり最後の授業では、評価の基準となるテストを兼ねて全体での小スピーチ、学習した表現を使ったロールプレイを行うこととした。5-1課では、研修生のスピーチ内容にあった賞を用意し、研修生が受賞の喜び、感謝の気持ちを伝える表現などを学ぶという項目を設け、教材構成、授業設計を行った。

表1 テキストの構成

1. <質問する> どんな人? 学習者同士で情報を聞き出す 「あいづち」を使う 話を続ける (相手にに関して得た情報をもとに) 紹介する	
2-1 <紹介・説明する> 映画/芝居/スポーツなどの 粗筋が話せ、感想が言える	2-2 <対話> 趣味を話す/印象や感想を話す
3-1 <説明する> 「理想の教師」について話す キーワード「きっかけ」を使って話す	3-2 <対話> インタビュー 「相手の体験や経験を聞き出す」 敬語を使う
4-1 <意見を述べる> 最近の若者/子ども 女性/男性 etc	4-2 <対話> 感情表現を使って自分の意見を 述べる
5-1 <皆の前で話す> 司会の言葉(閉会/開会/授賞式) 受賞の言葉	5-2 <対話> スキットショー

表1の1、2-1、3-1、4-1、5-1課を高橋が担当し、2-2、3-2、4-2、5-2を小池が担当した。以下それぞれの課の学習目標、および授業での扱い方について述べる。

4. 各課の構成と活動内容(スピーチ編)

第1回目の授業 (教材 1課 どんな人)

第1回目の授業は、ウォーミングアップという性格のコマで、ここでは自分のことを話すだけでなく、相手の話を引き出したり、会話を続けて行くというスキルに注意を向け、話し手、聞き手が協力しあって「対話」を作り上げて行くことを目指す。このスキルは研修生が2回目

から7回目までの授業を通して自覚し、実践していくものである。

このウォーミングアップ会話練習に入る前の活動として話を引き出すための「あいづち」やその他のテクニックに研修生の注意をむけるため、どのような「あいづち」の打ち方があるか、相手の話しを促すためにどのような技術があるかについて話し合ってもらおう。

第2回目の授業（教材 2-1 課 映画の紹介）

この課の学習目標、授業活動は以下の通りである。

【学習目標】

- 1) 映画関係の語彙と表現を学ぶ。
- 2) 粗筋が話せるようになる。
- 3) 感想、評価が言えるようになる。
- 4) 相手の感想、評価を聞き出す。

【教室活動】

- 1) 映画一般についての感想、意見交換
- 2) 映画の好き嫌いなど個人的嗜好について話す。
- 3) 映画を紹介するための語彙・表現を学ぶ。
- 4) 各自お勧めの映画を1本紹介する。

まず予習シートとして関連語彙・表現の表を作成した。授業の前に見てきてもらうことで研修生の映画に関するスキーマを活性化し、よりスムーズな授業展開を期待した。

この課での大きな到達目標は、映画の粗筋が話せて、自分の感想、評価が言えるようになるというものだが、授業時間内に1人1人が全員を前にそれぞれがお勧めの映画を1本紹介するということはおそらく無理であろう。そこで本教材では8回目の授業、すなわち教材5-1課において各課で取り上げたトピックでスピーチをする時間を設けた。そのため、授業時間内に完全なスピーチの形にならなくてもいいと考えている。研修生の興味を喚起し、小グループ内でくつろいだ雰囲気の中なかできるだけ自由な発話を促し、発言量を多くし、話すことに慣れてもらおうという意図からである。

第4回目の授業（教材 3-1 課 説明する）

この課の学習目標、授業活動は以下の通りである。

【学習目標】

- 1) 選択理由を述べることができる。
- 2) 具体的な例をあげて説明することができる。

- 3) インタビューの基本的質問の仕方を学ぶ。
- 4) 1課で学んだ「相づち」や話を引き出す技術が使えるようになる。
- 5) 決まり文句の敬語が使えるようになる。

【教室活動】

- 1) 「よい教師の条件」リストの項目に順位を付け、2～3人のグループで見せ合い意見交換する。
- 2) (講師は) 研修生の選んだ順位の高い項目、低い項目を黒板に示す。
- 3) クラス全体で高い項目、低い項目に焦点を絞り、研修生同士意見を交換する。
- 4) 2人1組でテレビのインタビュー番組の真似をする。
- 5) 2～3組のインタビューを見る。

この課の到達目標、活動の狙いは1) 決まりきった敬語表現を使い慣れ、インタビューの基本的質問の仕方を学ぶ。2) 1課で学んだ「相づち」、「確認」、相手の話を促す表現を使って相手の話を聞きだす、というものである。敬語を使う場を提供し、前回に学んだことを使って練習することが本教室活動の狙いである。

第6回目の授業(教材 4-1 課 意見を言う)

この課の学習目標、授業活動は以下の通りである。

【学習目標】

- 1) 意見、考えを表す文型を学ぶ。
- 2) 文法的に正しい文で意見が言えるようになる。

【教室活動】

- 1) 文章完成問題をする。予習として課しても、授業内に完成させても学習者のレベルに応じて調整してかまわないであろう。
- 2) 上記のウォーミングアップとして作った文を研修生同士小グループで読みあう。
- 3) 8つのトピック文について賛成か反対か態度を決め、自分の意見をまとめる。
- 4) 小グループで、あるいはクラス全体で各トピックについて賛成、反対意見を表明し、質疑応答をする。

この課の到達目標は、文法的に正確な文章で自分の意見が言えるようになることである。鋭い意見であっても文末があやふやだったり、構文的に筋が通らない文だったりすると説得力が弱まる。そのための活動が文完成作業である。この文型だけを使って話すわけではないが、正

確な構文、助詞に注意を促すのがこの活動目的である。

8つの文についての賛否の意見述べのモデル文は8回目の授業(5-1課)で示す。

第8回目の授業(教材 5-1課 発表会)

この課の学習目標、授業活動は以下の通りである。

【学習目標】

- 1) 発表の出だしと終わりの表現を学ぶ。
- 2) 間合いを効果的にとったスピーチをする。
- 3) はっきり発音する。
- 4) 聞いている人とのコミュニケーションを考えたスピーチをする。
- 5) 受賞の挨拶を学ぶ。

【教室活動】

- 1) 今まで話したトピックから1つ選んで2分で話せるようにまとめる。
- 2) 発表の形式に沿って話す練習をする。
- 3) 受賞の挨拶を練習する。
- 4) 各賞の授賞式を行う。

2-1、3-1、4-1課で様々なトピックを与えられてきた研修生だが、授業時間には制限があり、毎回小グループでの話し合いで終わってしまい、クラス全体を前にして発表する機会になかなか恵まれない。講師側としても学習者の口頭表現能力を評価する時間が必要である。そこで最後の2コマを2分間スピーチと2人1組によるロールプレイの発表にあてることにした。

以上が本教材を使用したスピーチ授業の流れである。次に対話における口頭表現練習の授業展開と教材の紹介をする。

5. 各課の構成と活動内容(対話編)

各回のテーマは以下のようになっている。

- 第3回(1-2課)「趣味を話す/印象や感想を話す」
- 第5回(2-2課)「相手の体験や経験を聞き出す」
- 第7回(3-2課)「感情表現を使って、自分の意見を述べる」
- 第9回(4-2課)「まとめの発表」

以下、構成上同一の第3～7回と内容的に異なる第9回とに分けて報告する。

a. 第3～7回の内容・構成と狙い

第3～7回では、テーマをさらに二つに分けた小テーマを立て、各回のテーマの内容・目的をより明確に認識できるよう配慮した。具体的には以下の通りである。

第3回「趣味を話す/印象や感想を話す」

1. 趣味を話す
2. 印象や感想を話す

第5回「相手の体験や経験を聞き出す」

1. 先生と丁寧な表現で会話をする
2. 友人などとくだけた表現で会話をする

第7回「感情表現を使って、自分の意見を述べる」

1. プラスの感情(うれしさ・喜びなど)を表出する
2. マイナスの感情(失望・悲しさなど)を表出する

第3回は、標題の内容と共に、独特の言い回しについても学習する。たとえば、料理の印象として「ほっぺが落ちるくらい(おいしい)」や「涙が出るくらい(辛い)」などといった表現も導入する。

第5回は、尊敬・謙譲・丁寧表現の確認と共にくだけた表現も学習する。また、特にくだけた表現の場合、イントネーションが重要な要素となる場合が多いので、併せてこれも導入する。

第7回は、「頭にくる」「しゃくにさわる」などといった慣用句や「ウキウキする」「イライラする」などのオノマトペを含んだ表現を用いて、感情を述べる練習をする。

以上が第3～7回の内容とそれに関する若干の補足である。以上の内容を踏まえ、上記の各回の小テーマごとにstep1からstep3の3段階を設定し、段階的に会話能力の伸展を図った。

step1は、自然な会話の流れと表現が認識できるように「Model Conversation」を提示し、当該のテーマを具体的にイメージできるようにした。step2は、step1で使われている表現などについて確認する。step3では、step1と2を参考にして話の流れや表現に注意し、さらに予習用課題の「予習シート」での表現を織り交ぜて実際に会話を練習し、自然な会話ができるような練習を取り入れた。

以上が、第3～7回の内容・構成とその狙いである。構成の中で、特に配慮した点は会話の練習が円滑に進められ、かつ目的意識が明確に持てるようにすることであった。実際の授業において、どのような問題が見出され、それをどのように修整すべきかについては6.2で述べる。

b. 第9回の内容・構成と狙い

最終回である第9回は「まとめの発表」とした。これは、第3～7回の各回での内容「趣味」「待遇表現」「オノマトペ」を踏まえ、それらに関する即興の会話を発表させるというも

のである。まず各回の内容に関係した言葉が書いてあるカードを数種類用意する。研修生にはペアを組ませ、カードを1枚引かせ、その書かれた語について即座に会話をさせるというものである。たとえば「趣味」ならば、「サッカー」「ボディビル」「フラダンス」「カラオケ」「料理」などの言葉が書かれたカードを1枚引いて、それをテーマに会話を進めるのである。

またそれと共に、はっきりとした発音や正しいイントネーションでスムーズに会話を進めることもチェックする。

発表は、「趣味」「待遇表現」「オノマトペ」の順序で進める。

【趣味】

はじめのトピックは「趣味」。7分間ほど受講生同士で練習をさせ、その後くじ引きで発表するペアを決める。ペアが決まったら、最初の1組のみが「趣味」のカードを1枚引き、そのカードに書いてあることについて、2分間の簡単な会話をさせる。他の受講生には、発表しているペアの会話を注意して聞かせる。最初のペアが終わったら、次のペアを決め、すぐに「趣味」カードを引かせて発表させる。

【待遇表現】

【趣味】同様、発表前に約7分間練習させる。発表は、ペアー一人一人が「ことば」カードと「待遇」カードから1枚ずつ引く。そして、たとえば受講生Aが「来る・尊敬」、受講生Bが「見る・くだけた表現」を引いた場合、Aは学生、Bは先生という役になる。役の設定を確認するために、10秒程の相談時間を与える。あとは、【趣味】と同じ。

【オノマトペ】

ペアで1枚のカードを引き、【趣味】と同じように発表させる。

今回の授業の目的は、あらかじめ準備した会話を練習するのではなくて、臨機応変に会話を進められるようになることに主眼を置いている。そして、会話の際に、第3～7回での授業内容はもとより、スピーチ形態の口頭表現力養成を目的とした2-1、3-1、4-1課で学習した語彙や表現をどれだけ使いこなせるかといった点も確認できる点で、総復習とも言える側面も持っている。その意味で、中級会話授業の最終回としては大変有用な内容ではないかと考えられる。

6. 授業報告

6.1 本教材を使用した授業報告

本教師研修プログラムのスケジュールは大変盛りだくさんで研修生は予習や宿題に取り組みねばならない。会話授業だけを受講しているわけではない。会話授業はそのようなプログラ

ムの中で研修初期に配置された科目であり、その後、他の科目、読解、聴解、特集へと学習を深めていく最初の一步になる。教材制作者としては、この点を考慮し、学習活動は、なるべく授業時間内に完結し、宿題を課さないようなコース設計と教材制作を行い、授業時間中の日本語運用をなるべく多くしようと意図した。その他の時間は他の科目の予習、復習にあててもらい、文法知識を始め、日本語、日本に関する知識を吸収し、それらの知識を総動員して、考えたこと、感じたことなどを口頭で表現する際の豊かさに結び付けられればよいと考えた。

6.2 各課の授業報告

第1回目の授業 1課 (紹介する 聞き上手・話し上手)

全体的に、Yes-No Question で質問するのは結構難しいようであった。「いつ」「どこで」という疑問詞がつい口をついて出てしまうようであった。答えのシートの言葉や数字を見て、「これは ですか。」という質問の形をとることが思考の流れとして自然なのであろうか、「この7というのはあなたの好きな数字ですか」という質問の形が多く、「(あなたは)7が好きですか」という文型の質問文はあまり聞かれなかった。前者の質問文は答えのシートに書かれた言葉の意味するものを探る質問であり、後者は相手の人物像を探り出す質問の形と言える。このゲーム形式では、その答えを書いた相手について知ろうとする気持ちを刺激するよりは、今ここにある現実の答えのシートに書かれた文字の解明に心を向けさせてしまったようだ。

このゲームで得られた情報を盛り込んで相手をクラス全体で紹介する活動においては、「特に興味深かった情報を一つ、二つ入れて紹介してください」と指示したのであるが、何人かの学習者は「 さんに..... と質問したら/聞いたら、..... と答えました/言いました」という伝聞形式で詳細に会話の報告をしていた。様々な伝聞表現を使って紹介文にうまく情報を組み込んでいけない様子が伺われた。

全般に話す内容の豊かさ、面白さを狙うまでは注意が向けられず、問題解決をしていくという姿勢が見えた。話を演出するという視点が弱いようであった。

「相づち」「確認」などを使い、会話を続けるということに関しては、意識的に、大げさも言えるほどなづいている研修生もいたり、制作者の意図に沿って練習ができた。話し手だけでなく、聞き手も意識的に積極的にかかわることで会話に弾みがつき、話し手の話しやすい環境が生まれてきたように見えた。

第2回目の授業 2-1課 (紹介・説明する 映画の紹介)

まず、「映画はあまり好きではない」という研修生が若干いた。「配偶者のお供で仕方なく見に行く」「映画を見るよりは山歩きや石の鑑賞など他の趣味に時間をついやします」という発言があった。映画の紹介のみではなく、テレビドラマ、芝居その他にジャンルを広げ紹介したり、石の鑑賞という趣味については2-1課に続く2-2課のトピックでもあったのでそこで心お

きなく紹介してもらうことにした。

「ティッシュペーパーをご用意ください」「手に汗握る」「背筋も凍る」「甘く切ない青春の思い出」などの決まり文句を入れて紹介することで映画（ドラマ、芝居も含む）紹介としてかなり体裁が整い、聞いている方もそのような言葉・表現が出てくると「ああ、ここで使うのか」と使い方を学ぶこともできたようだ。

しかし、粗筋を伝えるのは結構大変であった。作品の中の登場人物の描写、因果関係さらにそれを演じた俳優についてなど、複雑な構成の話になる。うまくまとめられる研修生もいれば、あれもこれも盛り込みすぎてしまう研修生も見られた。1課の人物紹介もそうであったが、日本語力が上がるにつれて話すべき情報の取捨選択の技も身についてくるようである。

第3回目の授業 2-2課（趣味を話す／印象や感想を話す）

この課で紹介されたオノマトペや慣用表現に研修生の興味が引き付けられていた。前回の授業ではトピックが映画、ドラマ、芝居といった演劇関係に話題が限られていたが、趣味一般ということで話しやすくなった研修生もいた。

ここで紹介された「ハラハラ」「ドキドキ」という擬態語と「鳥肌が立つ」という表現の使い方に説明が必要であった。印象や感想を表すものとして紹介されているのだが、「ドキドキ」は階段を駆け上って心臓が「ドキドキ」するなど物理的生理的現象にも使われる。まず、言葉の第一義から入っていく必要があった。「ハラハラする」というと話者は誰か第三者の行動を見て心配する状況で使うのが自然で、サーカスの綱渡りを見ている観客が落ちないかどうか「ハラハラ見守る」状況などいくつか例を提示する必要がある。また、「鳥肌が立つ」も本来のおぞましいものを見て、恐ろしい思いをして「鳥肌が立つ」と言う意味と合わせ、今日若者の間で使われている素晴らしい音楽を聴いて「鳥肌が立った」など感動したという意味も紹介するなど様々な具体例と説明が必要であった。研修生は、日本語教師という職業柄大変興味を持って学ぼうとする意欲が見られた。

モデル会話は、難しすぎず自分たちで自由に話題を発展させていく枠組みを与えていたようだ。

第4回目の授業 3-1課（理想の教師 理由を述べる）

この課で使用した「理想の教師の条件リスト」の語彙・表現を使い、意見を述べるという点でうまく機能していたようだ。さらに1課で学んだ相づち、確認、話を促すための表現なども次第に自然に出てくるようになっていたようである。

「授受動詞」の習得がおぼつかない研修生もあり、「(生徒に)～をしてくれる」という発言や、「お父さんが……とおっしゃいました」といった自分の家族について敬語を使用してしまうなどの誤用も見られたが、概ねまとまった意見を伝えていたようだ。

ちなみに、「理想の教師」については、「生徒をよく褒める」という項目が男性、女性研修生

ともに高く、「様々な教材や機器を用意し、教授法を開発し授業を面白くする」「教える教科の最新情報に遅れないようにする」「生徒が自律的に勉強する手助けをする」と高い評価があり、「自分の私生活を隠さない」「規律と規則を厳しく守らせる」「高い到達目標をかかげ、生徒にしっかり勉強させる」といった項目は評価が低かった。研修生の性別によって異なる傾向が見られた。男性は生徒の生活一般、人間形成にかかわった指導という視点からの発言が多いのに対して、女性は主に「生徒の自律的学習を助け」「教授法を開発し、面白い授業を準備する」という視点からの発言が多い傾向があった。また、最年長の男性研修生から「私生活を隠さない」を理想の教師の第一条件と考えていて、「自分は生徒を連れてよく山歩きに行き、帰りは食事を共にし、カラオケに行くんです」という発言があった。男性研修生の発言からは、言語教育だけでなく、生徒の人間形成に深く関わろうという熱い姿が垣間見られた。

第5回目の授業 3-2 課（相手の体験や経験を聞き出す）

この課では丁寧表現に対するくだけた表現も学ぶ。会話授業開始時からの問題であったが、研修生は全員が日本語教師であり、教師同士「先生」と呼び合うのが習慣になっている。第1回目の授業で会話の授業の時だけは「さん」で呼び合ひましょう、と指示したが、なかなか難しいようであった。特に年下の女性教師が年配の男性教師に向かって「さん」とは呼びづらい様子であった。そのような状況でくだけた表現、アクセント、イントネーションを練習するのである。実際の日本語使用場面では職業柄くだけた表現で対応することはないであろうが、聞きなれるためにも、くだけた表現の感覚を体得する必要がある。

本教材では、イントネーションの上がり下がりを中心に基本的規則を紹介している。教師が普通体で学生に話しかけるという実際の使用頻度の高そうな場面をモデル会話として提示している。

この課で研修生が制作者の予想に反して興味を示したのは、制作者としては余録の意味で設けた+の部分であった。それはどんな言葉に丁寧語の「お」が付き、どんな言葉に「ご」が付くかという付録の部分であった。外国語としての日本語を教える教師の苦勞がうかがえる。

第6回目の授業 4-1 課（意見を言う）

意見や感想を述べる文型をいくつか提示し、その構造と助詞に注意を向けさせ正確な文を構築する助けにしようと思図した。この面での文型提示が功を奏したかどうかは計りかねるが、諺を中心とする8つの短い文章に対して、スムーズに意見を言うことができたようである。文章が短い故、実例をあげたりしてグループで活発に意見交換をしていた。

第7回目の授業 4-2 課（感情表現を使って自分の意見を述べる）

2-2 課の時と同様、かなり詳細かつ具体的な説明が必要な表現がいくつかあった。特に「耳が痛い」は、ある状況が必要で、学習者に実際に使うよう促すためには、それなりの状況を用

意しなければならない。「キレル」などは本来の「よく切れるナイフ」「彼は有能で切れる」という用法を踏まえた上でその意味と使われる状況、またその言葉を使うタイプの人を特定しなくてはならない。「むかつく」なども心情としてはぴったりでもその言葉を使った時の回りの反応など、単に若者言葉として紹介するのでは足りないであろう。その言葉の意味にとどまらず、使用者のタイプ、社会での受け入れられ方など多岐に渡る説明が必要である。

研修生の「気持ちが悪い」の誤用が目立った。「話しかけたのに相手に無視されて、私は気持ちが悪くなりました。」というように感情表現として「気持ちが悪い」を使う誤りが多く見られた。これは韓国語話者のみならず、よく聞く間違いでもある。これを「むかつく」に置き換えると感情としてはぴったり当てはまりそうだが、気分を害したという感情が同じだからと言って置き換えるわけにもいかない。「腹が立った」という表現をここで提示し、誤用のたびに注意を促したが、なかなか定着せず「気持ちが悪い」が化石化している感があった。

第8回目の授業 5-1 課（発表）

聴衆に語りかけるテクニックを使うという課題はよく達成されていた。また、スピーチの出だしと終わりの表現も形通りではあるが、めりはりがあり立派なものであった。しかし、冗長さが問題として浮かび上がった。なかなか2分にまとめられず、時間が伸びてしまう。簡潔にしようとすると2分を切り、短すぎて抽象論で終わってしまう。時間配分と内容の充実度がうまく合わないのである。ここに中級話者の弱みがあるものと思われる。1課の「相手を紹介する」という活動でも問題になったが、聞いたことを逐一伝聞表現で伝えていくという生真面目とも言える表現手段から、要点のみを取り出して効果的にスピーチにまとめる表現力の養成が必要である。その意味で今回のような練習が効果的であろうと考える。

フィードバックは、紙面で行った。研修生による賞の投票、それを集計する時間を確保するのが難しかったため、各フィードバックシートに発表者、あるいは発表の内容にふさわしい賞を書き込んでそれぞれの研修生に渡した。

第9回目の授業 5-2 課（発表）

予定した発表形式はペアの交替があり、課題も「趣味」「待遇表現」「オノマトペ」と3つが用意されていたが、1クラスの人数が予定より多くなったこと、時間の都合と実際の授業で学習者が慣用句に興味を示したこともあり、大幅に簡素化した。しかし、授業時間にペアを決め、準備し発表するという基本は踏襲した。今回の発表はくじでペアを決め、各ペアがオノマトペの書いてある紙片を1枚、慣用表現の書いてある紙片を1枚選び、それらを上手に使って会話を作るというものである。各ペアに大まかな打ち合わせの時間は与えられるが、即興性が問われる。研修生は、授業で学んだ表現をどのように他の研修生が使うのか興味深そうに他のペアの発表を楽しんでいた。

7. 問題と今後の課題

今回の現職者研修の中級会話授業は、教材制作者が授業を行ったため融通も利き、好条件のもと授業が展開できたと考える。その中で特に対策が必要と感じられたことは、音声面でのフィードバックであった。第1回目の授業の際に、研修生の頭高アクセントに気づき、注意を促した。「私は、するのが好きですから、……」のアクセントが「刷る」「摺る」「擦る」「掏る」になっている。漢字と意味を示し、アクセントの違いで意味が異なることを示した。せめてこの研修期間中は気をつけてみましょうと注意を促した。このアクセントの問題は「する」動詞一つにとどまらないが、アクセント、イントネーション、プロソディー、プロミネンスなど音声全般に注意を向け、テープの声の調子などを真似ることで少しでも改良が見られればと意図したものである。その後の授業でも気がつく度に直すようにしていった。

さて、8回目と9回目の授業での発表のフィードバックは紙面で行ったが、ビデオ録画を見ながら音声面の指導ができることが望ましい。文末の独特のくせのあるアクセントなど紙面では指摘しきれない。また、1人1人の問題点も異なり、クラス全体で発音指導をして効果的なものもあるが、個人指導が必要なものもある。本研修においては、授業時間が詰まっており、なかなかそのような時間がとれなかった。1人につき15分程度でもそのような時間が持てたら理想的であろう。

対話に的を絞った課では、様々なオノマトペや慣用表現を提示したが、実際に使われているドラマの場面などを提示すれば、その表現を使用する状況の理解に大いに役立つであろう。「耳が痛い」という表現は、発言者は自分に直接言われたことに反応して「耳が痛い」と言うのではない。例えば、誰かが「教師と言うものは休みの日でもいつでも生徒のことを考えているものですなあ」と言うような発言をし、それを聞いた話者がわが身を振り返り、「耳が痛いなあ」と反応するわけだ。このメカニズムを説明し、さらに研修生に発話を促そうとするなら、映像などの手段を使用するのが効果的であろう。登場人物の心情描写をするという課題を与えれば、研修生に学んだ表現を使う必然的状況を提供できるであろう。

以上、音声面での個人指導の時間の確保、教材の対話を扱った課の視聴覚教材の併用という2点に課題として取り組み、研修生の日本語学習への熱意に応えたいと思う。

参考文献

- 衣川隆生・加納千恵子・長能宏子・金久保紀子・小池康(2006a)『一般日本語 SJ4-1』筑波大学留学生センター
- 衣川隆生・加納千恵子・長能宏子・金久保紀子・小池康(2006b)『一般日本語 SJ4-2』筑波大学留学生センター
- Friederik Kippel (1984) *Keep Talking*, Cambridge University Press